

見えないからこそ、見えてくるもの……

# ラッコの家 古川真人

夢とリアルが絶え間なく交錯する老女タッコは、  
自らの空想に怯えていたことを、笑い飛ばして生きる。  
老女の「意識の流れ」を描く、実力派新人の芥川賞候補作品

……息はいくらでもつづき、耳はずっと遠くの海をゆくクジラやフカやイルカの尾が揺れる音を聞いて、深い海の底までは光が届かないにもかかわらず目は岩肌に張り付いてじっとするサザエやアワビを簡単に見つけることができ、それで首を伸ばしてどれでも、飽きるまで好きに食べることも、また獲物にありつこうと岩伝いに歩くタッコを脅かすこともでき、鼻先で海底の砂を巻き上げ、浮き上がった貝殻や藻を足齧でどこか遠くにやっつけてしまひながら、ヒョウもおらんフヨウなもんもおらん、そうたい、そう、と嬉しさから言うことばは、鼻の穴から抜けた泡となって上へと昇っていく。(P68～69より抜粋)

★傑作中篇「窓」を同時収録。

## 古川真人 (ふるかわ まこと) プロフィール

一九八八年七月、福岡県福岡市生まれ。國學院大学文学部中退。  
二〇一六年に「縫わんばならん」が新潮新人賞を受賞、同作は芥川賞候補となる。  
二〇一七年に「四時過ぎの船」が芥川賞候補となる。  
二〇一九年に「ラッコの家」が芥川賞候補となる。  
現在、神奈川県横浜市在住。

## インタビュー、書評などのお問い合わせ

文藝春秋「プロモーション部」 03-3288-6142 [pr@bunshun.co.jp](mailto:pr@bunshun.co.jp)

(文藝春秋刊 1500円+税 7月31日発売)